

参加者、  
秋元、石川、内山、北島、  
斎川、斎藤(新入会員)、  
佐藤、田中、中島、町田、  
安田、山岡、吉野、

BMW RS Club

10/2-3

Oct 2~3, '04

往きは良いよい、帰りは恐かった  
相馬「飛天」への一泊ツーリング始末記  
かわらばん; 中島邦雄 挿絵; 小倉玲子

# かわらばん

九月も半ばを過ぎるとさしもの猛暑も時おり影を潜め、北海道の大雪山系からは、早くも紅葉前線の便りが届き始めました。TVで見ると北の大地の澄み渡った空の下に、緑の木々と黄金色に染まりかけたダケカンバ等の落葉樹が広がり、その中にナナカマドが燃え立つように色付く様は、厳しい冬を前にして、まさに自然の創り出す祭典美そのものと言えるかも知れません。以前この時期に大雪山を黒岳から朝日岳へと縦走し、その時に見た光景のあの身震いをするような感激が思い起こされます。

「少しでも降ってくれたら」と願っていた猛暑の間は雨が無く、その暑さが幾らか収まりかけた九月に入って、台風が次々と発生しては日本列島を襲い、広島の国宝「安芸の宮島」の社殿が吹き飛ばされたり、各地に大きな被害をもたらしました。

その台風の余波で我々の九月のツーリングも雨で流れました。その時に軽井沢から奥志賀へ走る予定のコースは、その3~4日前に浅間山が突如として噴火し、道路や嬬恋のキャベツ畑も真っ白に火山灰が降り積もり、火山岩も飛び散っていました。いつもは何気なく走っている道ですが、天明三年(1783年)の未曾有の大爆発の際には、千人以上が火碎流で死んだそうで、その名残りの「鬼押し出し」を見るにつけ、普段は穏やかに煙を吐くこの山の、噴火の時のその恐ろしさが思い知らされます。

民謡の「信濃追分」にも《浅間山さんなぜ焼けしゃんす すそに三宿(追分、軽井沢、沓掛)持ちながら》と繁華な宿場街を持つ豪勢な身分なのに、ねたましげに焼くことはあるまいにと謡われて、山裾の人々を昔から恐れ悩まし続けたようです。

暑さも一段落した10月2~3日に秋の一泊ツーリングが催行され、一度クラブで行って好評を博した「相馬野馬追」で名高い、相馬の「飛天」へ向かうことになりました。相馬市は福島県の東北端に有り、東京から北へ300キロの処に位置しています。ところが怖いかにこの週に入るや又もや台風21号が発生し、これがとんだ迷走台風で一度通り過ぎて又戻ったり、今週も駄目かと悲観的になっていました。ところが我々の祈りが通じたか、信心深いメンバーの多い事を神様はご存じか、早々と台風が通り抜け、当日は我々の心配をよそに台風一過のピカピカな、まさに秋そのものといった快晴の朝を迎きました。

前回は猪苗代湖のほとりで昼食をとり、ワイン5本にビール20何本かを飲み、紅葉が見頃の磐梯山を越えて、真暗な中での到着でした。その時の教訓から今回は、常磐道で早目に相馬へ入り、ゆっくり温泉と宴会を満喫しようという手筈になりました。

予定の9時半を大分回ったところで、「水戸IC」のすぐ先の「田野PA」へ向け、10台のバイクで「守谷SA」を出発しました。見事な晴天の中で中央分離帯に沿って夏の花の夾竹桃が未だ咲き残り、やがてそれがシャリンバイに変わると、その緑が暫く続いていました。10時に久慈川の長い橋にかかると目の前が急に広げ、風が無いせいか周囲がかすみ、春霞の中を走っているかのようです。朝の内は肌寒いようだったのに、半袖で走るメンバーも現れました。道路わきに気温27度のサインが出ました。

30分程で「田野PA」に到着するとクラブの最長老、町田さんが笑顔で我々を出迎えてくれました。彼は川越から水戸の近くへ工場を移築して商売大繁盛とか。大いに稼いでRSクラブに金を残してくれるそうです。先輩、ゴッツアンです! 頼みましたよ。

少し走って「中郷PA」で小休止、やがて白河の関、念珠ヶ関と並んで名高い、奥州三古跡の一つ勿来を11時に通過しました。高校で習った[吹く風を、勿来の関と思えども、道も瀬に散る山桜かな]という名高い八幡太郎義家の句が思い出されます。芭蕉と曾良は近くの白河の関を抜け《卯の花をかざしに關の晴れ着かな》の有名な句を残し、「奥の細道」への旅を続けました。

やがて「いわき中央」で常磐道を降りて料金所を出ると、一足先に着いた秋元さんが待っていました。早速に彼の先導で近くの食事処へ向かいましたが、12時まで未だ15分程ありました。魚の水槽が有り「昼から魚かい? 夜には旨い刺し身が出るのに」と思っていたら、この店は何でも有りで味も上々、その上に大変なボリュームで、食べ残している人が居たほどでした。

町田さんは酒も無いのにサンマの刺し身定食にかぶりつき、「俺はこれが好きでね~」とご満悦でした。

一時半に一般道で相馬へ向かいます。走り始めるとすぐに道の両側にはマリーゴールドが咲き乱れ、やがて秋桜(コスモス)、深紅のサルビアが「もう秋ですよ」と言うかのように咲いていました。ご機嫌で飛ばしていたら、飲んでもないのに食い過ぎの為か何度も道を間違え、あちらこちらと回りましたが、田圃の中の田舎道は信号機も無いレース場のような道ばかりでした。刈り取られた稻が田圃の中に組まれた丸太に干され、田圃の稻も黄色く色づいて僅かな風になびいています。

この辺りは古くから「相馬駒焼」という焼物が有名だそうで、田圃の中に窯元(田代窯)の大きな看板が立っていました。

四時前に320キロを走り「飛天」に全車無事到着。細身の奇麗なママさんと、昔馴染みの太目でこやかなマネジャーに迎えられ、玄関横にずらりと12台のBMWを並べると、少し前に車の石川さんも到着していて、我々を出迎えてくれました。

四階の部屋に入ってカーテンを明けると、松川浦の海と周囲の林が、前回と同じように穏やかに広がっています。早速、素晴らしい露天風呂につかって体を伸ばすと、近くに花ミズキが赤い実を付けて葉先を僅かに黄色く染め、山栗が実をつけているのが見えました。明日は午後から天気が崩れる予報ですが、「この状態では持つね~」と話しました。明日の帰りに回る磐梯山の、俳句などに錦秋と詠われる、あの目を奪われるような紅葉の見事さが目に浮かびます。

食事までは待てずに、部屋で早速に酒盛りが始まりました。

安田さんが銘酒《越の寒梅》二本を持ち込み、

更に秋元さんがビールや焼酎を買いに

出てくれて、運転中は禁酒の憂さを晴らすような感じで飲みました。

町田さんは上機嫌で急ピッチにコップ酒をやり、宴会場へ入った時は既に出来上がり、

何も食べずに消えて部屋にも見当たらず、結局はロダンの考える人

よろしく、便器に跨がってうたた寝をしていました。

長い距離を一日走り、風呂上がりにグイグイ飲んで一気に疲れが出たのでしょうか。宴会場へ入った事も覚えてないとか。



翌朝六時頃に風呂へ行く仲間の気配で目を覚ました。

カーテンを明けると「ウッソ~だろ~」雨降りです。

予報は午後から崩れる筈なのに、どうして

くれるんだ! と気象庁にねじ込みた

い気持ちにされました。露店風呂

に入ろうとガラス戸を明ける

と寒くて思わず声が出ました。

磐梯山どころではなく、どうやっ

て帰るかの話になりました。ホテル

の人も常磐道が「富岡」まで延びている

ので、それが一番早くに帰るとの事でした。

何度も外を眺めながら雨支度をし、ロビーで写真

を撮って九時半に300キロ先の東京を目指しました。

雨は一向に止む気配も見せずに降り続きました。魚市場を覗きながら水戸まで一般道を走って帰るという町田さんと、高速への別れ道まで走り、そこから常磐道の「富岡」へ入りました。建設途中で一車線の道が暫く続きガスがかかっています。

仲間は既に走り去り、それでも影さえ見えません。来る時に休んだ「中郷PA」を外から見ると、仲間と思える色とりどりの雨具が見えましたが戻ることも出来ず、早くに帰り着きたい一心でスピードを上げると、体が冷えてグリップ・ヒーターを入れた程でした。途中で「雨で走行注意!」のサインと赤色等を点滅させたパトカーが出現、ガクンとスピードを落としました。

「守谷SA」の近くで田中さんと山岡さんが追いついてきて、守谷に入るのかと思いましたが、無線が不調で聞くことも出来ず、彼等と3台で料金所に入りました。ここで無線が急に目覚め「何處で中島さんに抜かれたのかね~」という声が聞こえました。1時半に文京区の自宅着。相馬でガス補給後はノンストップで流石にこたえました。参加の皆様、本当に! ご苦労サマでした。